

安間一雄 (2010). 「英語能力テストとその利用」. 石川祥一・西田正・斉田智里 (編著). 『テストと評価 4 技能の測定から大学入試まで』 (144–172 頁). 東京: 大修館書店.

第6章 英語能力テストとその利用

* 見出しは発表者が適宜改変した。

3. 大学・短大での利用—調査報告 (pp. 159-171)

3.1 調査の目的・資料・調査項目

- 本節では大学・短大において TOEFL/TOEIC が、(a) 誰に (b) どのような場面で (c) どのような目的で使用されているのかを調査した結果を報告する。
- 資料として、TOEFL 事業部と TOEIC 運営委員会が刊行している 2008/2009 年版の報告書を使用した。
(1) 大学名 (2) 所在都道府県 (3) 設置者 (4) 学部・学科 (5) 専攻 (6) 試験形態
(7) 試験の用途 (点数加算・試験免除など) (8) 基準スコア

3.2 入学要件

3.2.1/3.2.2 基礎統計から見られる TOEIC/TOEFL の利用傾向

- 国公立大学・短大では外国人入試/帰国生入試/編入試験に TOEFL もしくは TOEIC を利用することが多く、特に外国人入試は国公立大学・短大での利用が突出していた。
- 逆に、私立大学・短大では選抜入試/推薦入試/AO 入試において TOEFL もしくは TOEIC が利用されていた。
- この傾向は専攻種別を問わず共通して見られた。

3.2.3 テスト優遇措置ごとの地域別学校数

- 調査の結果、関東地方では試験免除、近畿地方では試験免除、九州地方ではどちらも行わない大学・短大が多いことが分かった (東西でテスト利用の傾向に差はない)。
- 点数加算となる基準スコアと、試験免除となる基準スコアの間には有意差があり、TOEIC では 63.1 点 (加算 < 免除)、TOEFL では 49.6 点 (加算 < 免除) だった。つまり、試験免除の方が敷居が高い。

3.2.4 入学難易度ランクと TOEFL/TOEIC の基準スコアとの相関

- 学部・学科ごとの入学難易度ランク (代ゼミ偏差値表) と、その学部・学科が要求する TOEIC/TOEFL のスコアとの相関関係を検証した。
- 専攻種別に関わらず高い相関が見られたが、理系をさらに設置者別に分けると国公立・短大にのみ有意な相関が見られた。すなわち、私立大学が求める基準スコアは入学難易度に関わらず、恣意的に設定されている可能性が示唆された。
- 試験形態別で比較したところ、推薦・AO・外国人入試では高い相関があったが、編入試験では有意な相関が見られなかった。また専攻種別と同様、私立大学が求める基準スコアと試験形態別入学難易度との相関は見られず、スコア設定が恣意的であることが示された。
- さらに、すべての場合において TOEIC より TOEFL の方が難易度ランクとの相関が高かった。

3.2.5 難易度ランクによる優遇措置の有無の確率

- 難易度ランクを独立変数、優遇措置（点数加算・試験免除・出願資格引き下げ・指定なし）を従属変数とし、難易度ランクが優遇措置の有無をどれだけ予測できるのかを多項ロジスティック回帰分析により検証した。
- 全体的に、点数加算をする大学・短大は難易度ランクが中程度もしくは低い位置にあり、試験免除はその難易度にある大学でも行われていた。

3.2.6 TOEFL と TOEIC の基準スコアの相関

- 入学要件として各大学・短大が設定している TOEIC および TOEFL 基準スコアの相関は国公立大学・短大で非常に高く、TOEIC ⇔ TOEFL 換算式は ETS が公表していた換算式とよく似ていた。
- この換算式が基準スコアの換算基準として暗黙のうちに使用されていた可能性が高い。

3.3 単位認定

3.3.1 換算単位数

- TOEIC/TOEFL スコアを単位として認める大学のうち、2単位として認める大学が33.0%、4単位が29.9%、6単位が12.9%、8単位が10.2%だった。
- また単位認定基準スコアを数種類（e.g., 4単位/8単位/12単位相当）用意している大学もあった。しかし、換算単位数の設定が妥当でないケースも見られ、TOEFL450/TOEIC450 で4単位、TOEFL517/TOEIC650 で8単位なのに、TOEFL590/TOEIC850 では28単位を認める大学があった。さらに、認定スコアの値が TOEFL > TOEIC となっているケースもあった。

3.3.2 単位認定における TOEFL と TOEIC の基準スコアの相関

- TOEFL ⇔ TOEIC の換算式は ETS 公表のものと TOEFL520 付近ではほぼ一致しているが、低得点域で若干 TOEIC スコアを過大評価している傾向が見られた。

3.4 教育との連携

- TOEIC や TOEFL など大規模な外部標準テストは内容の安定性・データの信頼性・導入の容易性などの利点を持つが、テスト結果を教育現場で有効に活用できないという欠点もある。すなわち、これらのテストを受けても素点あるいは可否の判定が帰ってくるだけで、具体的な学習活動につながらないということが指摘されている。
 - ゆえに、各種テストの運営団体では、スコアあるいは判定結果から読み取れる能力記述（いわゆる Can-Do List）を提供しつつある（CASEC がこの試みでは一歩進んでいる）。
 - 特定の語彙・文法事項・ストラテジーの学習へのフィードバックを行うためには、教師の手作りテストに見られる様な、テスト項目 ⇔ 授業内容の対応関係が分かる項目を作成し、かつテスト結果を具体的な授業での教育内容に遡及して反映できることが求められる。
- (1) 語彙の難易度情報を集積し、受験者が解答するに際して障害となったと推測される語彙項目または語彙レベルを提示する。
 - (2) テキスト理解に必要なストラテジーを、テキストのメタ情報として記録しておき、受験者が解答するに際して適用できなかったと推測されるストラテジーを、テキストとともに提示する。
 - (3) ライティング・スピーキングにおいてマクロ構造/ミクロ構造のうち不十分だった点を記録し、解答例とともにそれらを提示する。

- 一方、教師および教材作成者は、より評価との連携を考えるべき。
- (1) 与えられた単元にどのような語彙・文法項目・ストラテジーが含まれているかを明示的に記録する。
- (2) 授業ごとに、学習者がこれらの項目をどの程度習得できたかを自己点検する機会を設ける。
- (3) これらの項目を習得するための、より体系立った練習問題を整備する。

おわりに

- 本章では一貫して、外部標準テストを有効に活用するためには、テスト自体の目的・構成概念を知るとともに、より客観的な評価につながるよう教育内容を点検する必要があることを述べた。

<まとめ>

- ・標準テストは能力テストである。
- ・標準テストごとに特色があり、それに沿った利用が望ましい。
- ・多肢選択型の問題は構造上の一貫性が保たれない。
- ・標準テストは必ずしも純粋な言語能力を測定するものではない。
- ・標準テストは言語能力を近似的に一次元の尺度で表したものである。
- ・標準テストの妥当性は今後も改善の余地がある。
- ・標準テストを標準化しようとする動きが進められている。
- ・TOEFL と TOEIC スコアの換算には慎重な適用が必要である。
- ・大学/短大において、標準テストは入学要件/プレースメント/単位認定の3種類の用途がある。
- ・入学要件として基準スコアを満たした受験者に点数加算をする大学は近畿地方に多く、試験免除をする大学は関東に多い。
- ・入学要件として設定された基準スコアは大学の難易度ランクとの相関が高い。
- ・TOEIC/TOEFL スコアの換算には、国公立大学では旧式換算式を用いる傾向がある。
- ・TOEIC/TOEFL スコアにより認められる単位数は2または4が多い。
- ・換算単位数は機関により設定の幅が広い。
- ・標準テストは教育現場での学習活動と連携させることで意義が高くなる。

<コメント>

外部標準テストを入試における優遇措置や単位認定に利用する際の問題点として、その要件を満たす基準スコアの設定が適切に行われているかどうかが挙げられる。入試での優遇措置については、私立大学において、優遇措置を得るのに必要な基準スコアが大学の入試難易度に比例しないことが指摘されていた。すなわち、難易度の低い大学でも TOEIC/TOEFL のスコアが相当高くなければ優遇措置は受けられないということになる。基準スコアを高く設定することで英語に非常に熟達した学生を集められるのではないかということが大学側の目的として考えられるが、そのような学生がわざわざ入試難易度の低い大学に、優遇措置だけを求めて受験しようと思うのかは疑問である。この場合、例えば入学後に奨学生として学費が免除されたり、海外留学のための資金援助が用意されていたりするなど、基準スコアに見合った制度が大学に整備されている必要がある。本章では入試の優遇措置と基準スコアの相関のみを検証していたが、このような観点からの調査も必要だと思われる。

次に単位認定について、文部科学省が定める大学設置基準では、「教育上の目的を達成するために必要な授業科目を自ら開設し」、その授業に対して単位を認定している。したがって、例えば一般英語の授業の目的が TOEIC/TOEFL の基準スコアをクリアすることであれば、それに対して単位を認定しても良いということになる。しかしながら、このような目的を達成した学習者に対してのケアも必要だと考えられる。少なくとも、

英語学習に対して自律した学習者に学生になるまでは、単位を認定しつつも、さらに上の目的をもった授業を供給することが重要だと思われる。